



紹介

動く大地、住まいのかたち： プレート境界を旅する

中谷礼仁



岩波書店 2017年3月24日発行 四六判
268ページ、定価2,600円(税別)
ISBN 978-4-00-022235-8

「ああ、こんな時代がやってきたのか」、「ついに、こんな人が現れたのだ」。

この本を読み進めつつ何度思ったことだろう。この本の著者、中谷礼仁氏は建築史、歴史工学、建築理論の専門家であるが、本書はその中谷氏が地質図を携え、意識的に世界中のユーラシアプレートの境界に赴き、それぞれの土地における建築のありようを調べ体感した、フィールド調査のエッセンスである。

2013年1月2日～9月9日の8ヶ月のあいだに、約1ヶ月から1ヶ月半にわたる旅を4度も敢行し、その行程は、インドネシア、インド、ネパール、イラン、そして、トルコ、ギリシア、マルタ、シチリア、チュニジア、モロッコと、ユーラシアプレートの南の境界を一気に駆け抜けたことになる。

この旅は、東日本大震災後に東北の海岸沿いを訪れた際、建築の土台となるべき大地が水中に没しているのを目の当たりにしたこと、その経験により、以前聴いた日本とアジアはプレート境界を通じて繋がっているという話を思い出したこと、また、地図を見返した際、古代文明圏が成立した箇所とユーラシアプレートの境界の関係性に気付いたこと、

などが発端になっているらしい。これらもろもろが、「プレート運動は、まさに創造と破壊の両面をかね備えていた。この両方に直面している各地域において、人間がどのように住まい、ひいてはどのような文明・文化を紡いできたのかを、大きくつかみたい」という想いとして結実したわけだ。

本書では、旅先で出会った人々、それらの人々が暮らす住まいについて、詳細に、しかもかなりの温かみをもって述べられている。「パンゲアのかげら」、「屋根となった溶岩」、「石は建築の父」、「土は建築の母」など、小見出しを少し拾うだけでも、地質が重く扱われていることが実感できるだろう。とくに、石灰岩と大理石にいたっては「適度な柔らかさは、人間に彫刻芸術というもう一つの飛躍をも、もたらした」と大絶賛されている。その本来海にあるべき石灰岩が陸に露出していることを、付加体モデルの図入りで解説する至れり尽くせり具合だ。また、氏の日本語はどこまでも美しく、時に詩的ですらある。純粋に読書する楽しみを思い起こさせてくれる。

訪れた場所は、すべて英文表記もなされ、かつ緯度・経度も記されているので、すぐにweb上の地図で飛ぶことができる(ただし、これを本気でやり出すと、ちっとも読み進められない状況となる)。また、本書には訪れた地点の様子を理解するのに補助となる写真・図等が掲載されているが、さらに氏個人ホームページでは旅の貴重な記録となる写真も惜しげもなく公開されている。

この旅の着想が、古代文明とユーラシアプレート境界との関係性についての気づきであるので、自然に、家、集落、国家、文明の関わり・階層性についても氏の筆は触れている。少し、引用してみる。

「人間の住まいの原則とは何か。端的に主張すると、それは大地から縁を切ることである。座ったとき、寝たときに大地の状態を直接体が受け止めないようにすることである。」

「人間は近場の大地から家を作る。つまり物質の水平、垂直の移動によって、ほんの少しだけ大地を動かし、その隙間に人の住みつく空間を作りあげる。これが家であり集落なのだ。」

「大地の素材を水平、垂直に移動し、人の住む空間を作り上げたのが集落だとすれば、それはいまだに大地の性質からの制限を強く被っていた。文明の誕生とはそのような段階から離れることである。」

「実際のところ集落は永続するが、国家は誕生と滅亡を繰り返した。」

一方、地質の側からみた建築のありよう、さらに地質の立場からみた文明論に関する考察は、少数精鋭の観はあるが、1980年代以降、連綿と継続されている(例えば、原田、1990; 蟹澤、2010など)。本書の発刊は、建築の側からも橋が延ばされ、ついに、両者が有機的に繋がりがつつある、ということなのかもしれない。

この旅は、中谷氏単独の場合もあるが、基本的には、中谷氏と専門や得意とするフィールドのやや異なる一人もしくは二三人の研究者の同行、さらに現地の協力者を得て行われている。この本を読み進めつつ、何度も妄想してしまったことは、この旅にフィールド地質学を専門とする地質屋が加わっていたら、どうなっていたのか、という点である。

近年、地質学会の全国大会において、ジオパーク関連の発表会場は活況を呈し、かつ文化地質学のセッションもレギュラー化され、地質と文化の距離は急速に縮まりつつある。中谷氏本人、もしくは中谷氏と同様の指向を持つ建築の専門家と地質学会や連合大会等の場で議論できることも遠い未来のことではないだろう。「あとがきに代えて」によれば、氏は、現在プレート境界には位置していない土地の地質と建築の旅を視野に入れていようである。それが地質学者との濃厚な関わり合いのもと実現されることを期待したい。

文献

原田憲一、1990、地球について、国際書院、373p.

蟹澤聰史、2010、石と人間の歴史：地の恵みと文化、中公新書、257p.

(茨城大教育 伊藤 孝)